

インスブルック大学の大学記念碑とその歴史意識

増 田 正 勝*

目 次

- I. はじめに
- II. インスブルック大学
- III. 第一次世界大戦とインスブルック大学
- IV. ファシズム体制下のインスブルック大学
 - 1. オーストリア・ファシズムの形成
 - 2. ナチスの台頭とインスブルック大学
 - 3. インスブルック大学における反ナチス抵抗運動
- V. 「白バラ」のプローブストとインスブルック大学
- VI. 大学記念碑の歴史意識
- VII. むすび

I. は じ め に

インスブルック大学にはそれ以前にも2度訪れたことがあったが、大学本部の前の大きな木立の中に巨大なモニュメントが立っていることにはじめて気づいたのは1992年9月のことであった。図書館を出ると、右手に大学本部の建物、左手にインライン通りがあって、その間に広場が広がっている。木陰をくぐり抜けると、大学本部の広い前庭に出る。その向こうに木立があって、4本の大きな菩提樹に囲まれる形でそのモニュメントが立っていた。

どっしりとした三角柱の石碑の上に、ほぼそれと同じ高さの大きな青銅の鷲が座し、鋭い眼差しで天空を睨んでいる。近寄って見ると、正面に“Ehre”（榮譽）と

* 広島経済大学経済学部教授

大きく刻んであった。次の面には“Freiheit”（自由）とある。さらに回ると“Vaterland”（祖国）とあった。何の記念碑だろうとさらに近づくと、ちょうど目の高さのところに真鍮の板がはめ込まれていた。

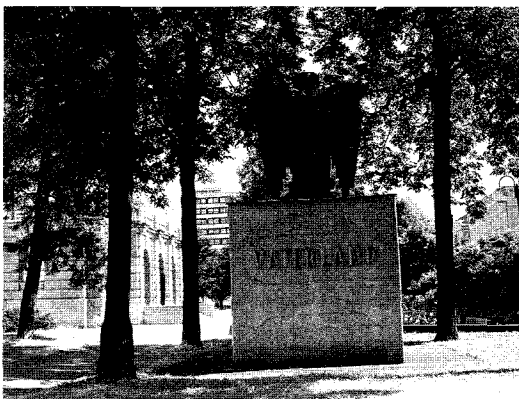
「ヒューマニティー・自由・民主主義／本学医学部学生・白バラのメンバー、クリストフ・プローブストを追悼して／抵抗運動闘士として1943年2月22日国家社会主義者によって処刑さる。⁽¹⁾」

ひとつ角を曲がると少し下のほうにもう一つの銘板があった。

「本学神学部卒業生、イエズス会士イグナシオ・エラキュリア教授とイエズス会士セグンド・モンテス教授を追悼して／平和と正義のために闘ったがゆえに1989年11月16日サン・サルヴァドルで殺害さる。⁽²⁾」

そのときは後者のほうの銘板にはほとんど思いが至らず、ここでプローブストの名に出会ったことに大きな驚きを覚えていた。ヒトラーに抵抗した学生たちの「白バラ」のサークル⁽³⁾についてはすでに本で読んで知っていた。同じ日に、プローブストとともに、ハンス・ショル、ゾフィー・ショル兄妹も処刑されている。ギロチンによる斬首刑であった。ショル兄妹はプロテスタントの信仰をもっていたが、プローブストは処刑前にカトリックの洗礼を受けている。とりわけこの3人のことはあたかも殉教者のごとく筆者の中に深く刻み込まれていた。プローブストもショル兄妹と同じようにミュンヘン大学の学生だと思い込んでいたので、インスブルック大学での遭遇に驚いていたのである。

このとき、筆者は、人間の自由のため、正義と平和のために自らの命を捧げた殉教者たちを、こうして大学記念碑で称えようとするインスブルック大学の精神に深い感銘を受けた。そのときの印象を後に『塩、もしその味失わば』というエッセイ⁽⁴⁾に綴った。しかし、このモニュメントに刻まれた「荣誉」「自由」「祖国」という三



つの言葉にずっと違和感をもちつづけていた。むしろプローブストにふさわしいのは、「自由」「正義」「民主主義」あるいは「平和」ではなかろうかと。

2001年9月チューリッヒからウィーンに向かう途中インスブルックに立ち寄ったが、このときもこの違和感は抱いたままであった。大学記念碑の由来を訪ねてみたいという思いがいつそう募った。この間、1994年3月、大学本部前の広場には「クリストフ・ブローブス広場」(Christoph-Probst-Platz) という名称が与えられた。⁽⁵⁾

2005年8月、2週間ほどインスブルックに滞在する機会があったので、大学図書館で関係文献を探索してみた。情報資料室 (Informationsabteilung) の助力を受けて以下のような文献を収集することができた。

Grünwald, Eduard: Unser Gedanken an Christoph Probst. Eine Ansprache anlässlich der Enthüllung der Tafel “Christoph-Probst-Platz” an der Universität Innsbruck am 16. März 1994, in; *Das Fenster. Tiroler Kulturzeitschrift*, 28. Jg., H. 56, Innsbruck, Frühjahr 1994.

Grünwald, Eduard: Christoph Probst von der Universität Innsbruck nicht mehr ausgeschlossen, in; *Das Fenster. Tiroler Kulturzeitschrift*, 28. Jg., H. 57, Innsbruck, Herbst 1994.

Oberkofler, Gerhard/Groller, Peter: *Geschichte der Universität Innsbruck (1669–1945)*, Frankfurt am Main/Berlin/Bern/Wien, 1996.

Oberkofler, Gerhard: Das Innsbrucker Universitätsdenkmal. Ein Gebrauchsgegenstand der Professorenwelt, in; *Das Fenster. Tiroler Kulturzeitschrift*, 34. Jg., H. 70, Innsbruck, Herbst 2000.

Leopold-Franzens-Universität, hrsg. von Universität Innsbruck, Innsbruck 2001.

とりわけ「記念碑というものについて最も印象的なことは、だれもそれに注意を払わないということである (Robert Musil)」という言葉を用いて始まる、オーベルコフラーの2000年の論文は、前述の筆者のエッセイを完全に打ち砕くものであった。むしろ批判さるべきは、インスブルック大学の精神であり、それを体現している教授たちの世界だという。そのような視点はオーベルコフラーの『インスブルック大学の歴史 (1669–1945)』にも貫かれている。一体、インスブルック大学の大学記念碑にはどのような歴史が込められているのか。筆者自身もそれを垣間見ざるを得なくなってきたのである。

Ⅱ. インスブルック大学

インスブルック大学の歴史は古い。その前史は、1562年、イエズス会のギムナジウムが設立された時代に遡る。それを基礎に、1669年、皇帝レオポルド一世 (Leopold I, ローマ皇帝在位1658年-1705年) によってインスブルック大学が創設された。大学の財政は、ハレ (Halle) の塩に特別税をかけることによって確保されたという。1677年には四つの学部をもった将来構想が描かれていたが、その後およそ150年間は2度も解体され再生されるという運命に見舞われる。この間に神学部、哲学部、法学部、医学部の前身が設立されている。

現在のインスブルック大学の最終的な基礎が築かれるのは、1826年以降のことであって、皇帝フランツ一世 (Franz I, ローマ皇帝在位1792年-1806年, オーストリア皇帝在位1804年-1835年) の力による。その後、インスブルック大学は、“Leopold-Franzens-Universität” と称されるようになった。神学部、哲学部、法学部、医学部が再建され、19世紀半ば以降には、フンボルト的大学像をめざして、哲学部は、精神科学諸学部と自然科学諸学部へ発展していった。

20世紀に入って、インスブルック大学は、4人のノーベル賞受賞者を輩出している。⁽⁶⁾ 歴史ある大学とはいえ、ウィーン大学などドイツ語圏の他の古い大学から見れば、チロル・アルプスの一地方大学にすぎない。そこに4人ものノーベル賞受賞者が生まれている。300有用年をかけて営々と築かれてきたアカデミズムの伝統に深い敬意を表せざるを得ない。

現在では、社会科学系・人文科学系・自然科学系・工学系の15の学部をもった総合大学となっている。⁽⁷⁾ 伝統ある医学部は今日では「インスブルック医科大学」として独立している。

旧市街 (Altstadt) から大学通りに出ると、すぐに右手に、最も歴史の古いカトリック神学部が現われる。イエズス会教会 (Jesuitenkirche) の前の広場には、第二バチカン公会議 (1962年-1965年) に大きな影響を与えた神学者カール・ラーナー (Karl Rahner 1904-1984) の名が与えられている。さらに行くと、大学通りの左手に、社会科学系の学部が入っているモダンな建物に出会う。その中庭に「ベーム - バヴェルク広場」がある。ベーム - バヴェルク (Böhm-Bawerk, Eugen von 1851-1914) は、メンガー (Menger, Carl 1840-1921) の限界効用理論を発展させた、オーストリア学派の代表的存在である。

他の学部もイン (Inn) 川沿いに点在している。旧市街のイン橋から大学橋へ向かって1キロほど遡ると、人文・自然科学系の学部、大学図書館、大学本部に至る。

大学本部前のインライン通りを挟んで、生物学部、医科大学、付属病院がある。

インスブルックは、夏は世界中からのツーリストで賑わい、冬はウインタースポーツを楽しむ人々が訪れる、チロル最大の観光地であるが、イン川沿いに広がる大学の広大な敷地を見ると、むしろ大学都市といってもよさそうである。

インスブルック大学は、30年戦争後のヨーロッパ世界を身をもって生きてきた。ハプスブルク家の盛隆と衰退を目にし、その間にナポレオンが攻め入り、ウィーン会議が開かれ、やがてプロイセン・ドイツの強力な支配のもとに第一次世界大戦にまき込まれ、さらにヒトラーによるオーストリア併合、第二次世界大戦へと、激動の近代を生きてきた。

大学本部前の広場にある大学記念碑の前に佇んで、インスブルック大学の来し方に思いを馳せながら、この大学記念碑はいったいどのような事情でいつ建造されたのだろうか、と強い好奇心にとらわれた。

Ⅲ. 第一次世界大戦とインスブルック大学

先述のオーベルコフラーの資料によって、インスブルック大学の大学記念碑が建造・除幕されたのは、1926年7月3日のことであることがわかった。⁽⁸⁾ 大学記念碑の設計は、チロルの建築家ヴェルツェンバッハ (Welzenbach, Luis) によるもので、第一次世界大戦で戦死したインスブルック大学の学生たちを追悼するとともに、チロル州の統一を永遠に記憶するために建造された。

記念式典は、伝統的な形式で行われた。まず、大修道院長の司式による荘厳追悼ミサ、除幕、国歌“Deutschland, Deutschland über alles”の斉唱、学長のあいさつ、学生組合代表のあいさつ、歌“*Ich hatte einen Kameraden*”の斉唱、音楽が演奏される中での献花。夜になると運動場で、オーストリアの詩人・劇作家ホフマンシュタール (Hofmannstahl, Hugo von 1874–1925) の演劇『エレクトラ』が上演された。

この式典の中で、元学長のリットラー (Rittler, Theodor) は、「ドイツよ、汝の帝国よ、来たれ！」(Deutschland, Dein Reich komme!) とスピーチを終え、学長のシュヴァイドラー (Schweidler, Egon Ritter) は、「偉大なる自由にして唯一のドイツなる祖国」(Ein großes freies einiges deutsches Vaterland) と呼びかけた。

大学記念碑の除幕式が行われた翌年の1927年6月30日、インスブルック大学は、創立250周年記念の祝祭を行っている。第一次世界大戦で戦死した学生たちを追悼して大学記念碑の前でトーチが焚かれ、チロル賛歌とファーラーズレーベン

(Fallersleben, Hoffmann von 1798-1874) の作詞したドイツ国歌が夜遅くまで歌われた。この式典で、ハイデルベルク大学の学長パンツァー (Panzer, Friedrich) は、ドイツ本国の大学を代表してスピーチをしている。彼は、第一次世界大戦後、戦勝国によって宣告された、ドイツとオーストリアの「合邦禁止」(Anschlußverbot) に対して改めて反対する姿勢を明らかにし、民族性の内的統一を表明するために外的な国家的形態が認められるべきだと主張した。

第一次世界大戦後の新秩序は、インスブルック大学においてはほとんど公的に評価されることはなかった。1918年11月12日、臨時国民議会は全会一致で「ドイツオーストリア共和国」を宣言した。これはドイツとの統合を理念とする共和国であったが、フランスの反対によって、1919年9月10日の「サン・ジェルマン講和条約」はドイツとの関係を断つ形で「オーストリア共和国」とした。しかし、この共和国はインスブルック大学でも受け入れられることなく、依然としてオーストリアとドイツの統合を求める「大ドイツ主義」が唱導され続けていたのである。

「民主的なオーストリア共和国の建国日は、大学の祝祭カレンダーの中ではまったく何の役割も果たさなかったが、1871年の帝国成立50周年に当たる1921年1月18日が到来するや、ドイツ帝国 (Deutsche Reich) 建国日は毎年厳かに祝われるようになった。」⁽⁹⁾ この祝祭にさいして、インスブルック大学の歴史学教授シュタインアッカー (Steinacker, Harold) は、「第二ドイツ帝国建設50周年にさいしてわれわれの決意を総括するならば、われわれドイツオーストリア人 (Deutschösterreicher) も所属する、第三の、より偉大なるドイツ帝国の建設のためにわれわれは行動しなければならないということである」⁽¹⁰⁾ と演説した。

大学記念碑に刻まれた「榮譽」「自由」「祖国」という三つの言葉は、こうしてその意味するところが明らかとなってきた。

第一次世界大戦後8年を経て建造された大学記念碑には、若者たちが血を流した世界大戦を省みて平和の到来を願う心はない。むしろ戦争の悲惨さを追悼碑でもって覆い隠し、再び若者たちを戦場に駆り立てるシンボルとなってきたのではないか。「祖国」とはかつてのドイツ帝国であり、「自由」とはドイツ帝国の自由であり、かくなるドイツ帝国の再建に命を捧げることを「榮譽」としたのである。オーベルコフラーはいう、「大学記念碑は、もともと顕彰碑 (Ehrenmal) ではなかった。むしろ全大学を代表するインスブルックの教授大多数が希求していた報復をまさに反映するものであった」⁽¹¹⁾ と。戦勝国に報復しドイツ帝国の再建を願望するシンボルがこの大学記念碑であったという。

第一次世界大戦中、インスブルック大学は、将軍たちに名誉博士号を授与してい

る。哲学部は、1915年7月、チロル州防衛司令官のダンクル（Dankl, Kavallerie Viktor）将軍に名誉哲学博士号を、医学部は、1916年1月、オイゲン（Eugen）オーストリア皇子大公および最高司令官ヘッツェンドルフ（Hötzendorf, Conrad von）男爵に、さらに1916年10月にはサルバートル（Salvator, Franz）大公に、名誉医学博士号を授与している。第一次世界大戦が始まったとき、インスブルック大学の学長は、オーストリアの古くからの課題を遂行すべき時が来たとして、「教養のない馬鹿者どもの東欧に対してドイツ的文化の先駆者として闘おう」と檄を飛ばした。戦場で壮絶な殺戮が行われている間に、大学は、将軍たちに名誉博士号を与えることによって、戦争遂行に対してイデオロギー的貢献をなそうとしたのである。オーベルコフラーはこれを「恥ずべき戦争名誉博士学位（Kriegs-Ehrendoktorate）」⁽¹²⁾と称している。

ドイツとオーストリアの統合を求める志向は、教授たちだけに強く見られたわけではなかった。学生たちもまたドイツ・オーストリアの統一を強く求めている。

「ドイツ学生組合」（Die Deutsche Studentenschaft）は、公法的に承認された存在ではなかったが、私法的団体としてはそれぞれの大学当局によってその活動領域が公認されていた。インスブルック大学の「ドイツ学生組合」支部は、ドイツ・オーストリアの「合邦」を政治的目標として掲げていた。1920年代の末まではまだナチズムに侵略されておらず、カトリック系学生が学生組合の主流を占めており、全体としては「大ドイツ主義」がその基本的思潮となっていた。

1926年、大学記念碑が除幕された当時のインスブルック大学の政治思想的状況は、以上のものであった。世界に冠たるドイツ帝国の意識が、大戦後もそのまま持続され、大学記念碑として象徴化されていたとすれば、そのような歴史的背景を自覚せずに筆者が漠然と抱いた違和感は、十分にその根拠をもっていたわけである。

IV. ファシズム体制下のインスブルック大学

1. オーストリア・ファシズムの形成

大戦後の1919年2月16日総選挙が行われ、72議席をとった社会民主党と69議席のキリスト教社会党との間で連立内閣が形成された。しかし、ドイツ社会民主党よりもはるかに左翼的なオーストリア・マルクス主義の社会民主党と、農村中産階級とカトリック教会を支持基盤とするキリスト教社会党との連立が崩壊するのに時間はかからなかった。1920年10月17日の総選挙では、社会民主党62議席に対してキリスト教社会党は79議席を得た。1922年5月、キリスト教社会党のザイペル（Seipel,

Ignaq 1876-1932)を首班とする新政府が成立した。聖職者でウィーン大学教授(神学博士)であったザイペルは、階級闘争路線に立った社会民主党に対して明白な対決姿勢を打ち出した。

大戦後のオーストリアは、政治的混乱に加えて極度の経済的困窮に見舞われていた。国家財政は絶望的な状況にあり、ザイペル内閣にも打開の道は開かれなかった。キリスト教社会党は、1923年の総選挙では81議席を獲得したが、1927年4月の総選挙では9議席を失ってしまった。ザイペルは、12議席の大ドイツ党の「農村同盟」(Landbund)と連立を図った。この年の7月15日「ウィーン騒乱」⁽¹³⁾が起こった。社会民主党の指導下にあった労働者とファシスト団体「護国団」(Heimwehr)との間で苛烈な市街戦が展開され、社会民主党の武装団は壊滅した。この騒乱によって「護国団」の勢力は大きく成長する。ボルシェヴィズムの恐怖からオーストリアを救うことを自己の使命と自覚するザイペルは、この「護国団」を議会外勢力として独裁政治を敷いていった。

1932年5月、ザイペルの跡を継いでキリスト教社会党のドルフス(Dolfuss, Engelbert 1892-1934)が政権に就いた。ドルフスは、大オーストリア主義の信奉者であり、ナチス・ドイツには反対であった。ザイペルと同じように、議会と議会外勢力の両刀作戦をとったが、政治的不安はいかんともし難く、1933年3月7日、クーデターによって議회를停止し、ファシスト独裁政権を宣言した。1934年4月30日、イタリア的な職能組合主義(Korporatismus)に基づく新憲法を通過させ、議会民主主義は否定された。ドルフスは、ムッソリーニのイタリア・ファシズムに接近を試みるが、1934年7月25日、ローマへ出発しようとしていたところをオーストリア・ナチスによって暗殺された。この反乱は一応鎮圧されるが、ナチスの非合法的活動がオーストリアの国家的運命を決定的に変えていく事件となった。

ドルフスの遺志を継いだのは、国民カトリック派のシュシュニック(Schuschnigg, Kurt von)であった。大オーストリア主義者でドイツに対するオーストリアの独立保持を追求し、強固な反共主義者であった。1936年10月、シュシュニックは、従来の志願兵制度を廃止して強制徴兵制を敷いた。それは、国内の様々な半軍事的団体を正規軍へ編入することによって、オーストリア・ナチスを抑圧するためであった。しかし、ムッソリーニとヒトラーの接近は1937年7月11日の「ドイツ・オーストリア協定」、いわゆる「7月協定」をもたらし、その結果、オーストリア・ナチスの非合法的活動に大きく道を開くこととなった。1938年3月、ヒトラーは、かねてからの懸案であった「ドイツ・オーストリア併合」を強行し、同年4月10日の国民投票によってドイツへの併合が承認された。やがてユダヤ人の大量逮

捕と強制収容所への移送が始まった。

第一次世界大戦後のオーストリアは、ファシスト国家イタリアとナチス・ドイツの間に挟まれてその運命を翻弄される存在であった。いずれにしる「ファシスト化するの⁽¹⁴⁾はまぬかれえない運命」であったかもしれない。しかもその中にあってオーストリアが「長い間第三帝国への抵抗を続けられようとはもちろん信じがたいこと⁽¹⁵⁾であった。それにしても実際には5年間、もちこたえたのである。」したがって、大戦後オーストリアにおいて広く信奉された「大ドイツ主義」、すなわちドイツ・オーストリア合邦運動をそのままナチスの併合運動と「同等に扱ってはならない⁽¹⁶⁾」だろう。しかし、それにしてもオーストリアにおけるナチズムの台頭を許したのはどのような条件であったのか。

ツェルナーは、三つの要素を指摘している。まず、ヒトラー政権はドイツに一定の経済的成果をもたらし、それがオーストリア中産階級の失業者やホワイトカラー失業者に国家社会主義に対する期待感を生み出していたことである。いまひとつは、ナチスの過激な反ユダヤ主義には反発があったとしても、オーストリアの政治的伝統の中には反ユダヤ主義の思潮が古くから流れており、そのうえ大戦後の経済的困窮はユダヤ人問題によって解決されるのではないかという期待を抱かせた。さらに、ツェルナーは、ヒトラーの外交的成功がオーストリアの大ドイツ主義に一定の幻想をもたらしたことを指摘している。プロイセン人よりもオーストリア人こそドイツ的・キリスト教的伝統の継承者であり、良きドイツ人であるという意識がナチズムの民族主義に幻想を抱かせたという⁽¹⁷⁾。

2. ナチスの台頭とインスブルック大学

「ドイツ学生組合」のインスブルック大学支部では、1930年の時点ではまだカトリック学生代表が優勢を占めていた。35人の委員は、ドイツ・カトリック統一派代表20、ドイツ民族派代表12、その他（学生組合に所属しない民族派および特定派閥でない民族派）3、で構成されていた。しかし、1933年2月になると、委員会の29の議席は、武装学生団体（Waffenstudentenschaft）代表10、ナチス・ドイツ学生連盟（Nationalsozialistische Deutsche Studentenbund）代表10、学生組合に加入していない民族派代表9、によって占められるようになった。カトリック派の学生組合は完全に排除されてしまった。

カトリック学生団体も伝統的に反ユダヤ主義（Antisemitismus）の立場に立っていたとはいえ、ナチスの急進的な人種差別的な反ユダヤ主義（Rassenantisemitismus）に同調することはできなかった。1932年末、ウィーン大学では、カトリック学生団

体が武装学生団体とナチス学生団体によって奇襲されるという事件が起った。この事件の後、インスブルック大学の「ドイツ学生組合」も解体に追い込まれていく。

「ナチス・ドイツ学生連盟」と「武装学生団体」との間にはそれまでいくつかの確執があったが、1937年の「7月協定」を境に両者間に人的な交流も見られるようになり、やがて1938年3月以降に生まれてくる「ナチス学友会」(NS-Kammeradschaft)に合流していく。

学生団体における反ユダヤ主義的傾向は、インスブルック大学がファシズム化に至る道を準備したといえる。1920年2月、インスブルック市民ホールにおけるユダヤ人教授クラウス(Kraus, Karl)の講演は、大きな妨害を受けた。さらに学生団体の反ユダヤ主義を批判した哲学教授カスティル(Kastil, Alfred)もドイツ学生組合から激しい抗議を受けた。学生組合から寄せられた抗議を大学評議会は退けるどころか、そのままカスティルに伝えた。カスティルは学生の脅迫やテロに屈することはないことを表明したが、反ユダヤ主義がインスブルック大学を大きく揺さぶり始めた事件であった。

1922年11月、ドイツ学生組合理事会は、大学評議会に対して以下のような請願を行っている。「①学長、学部長、その他の管理職には、ドイツ人の血統でドイツ語を母国語とする教授を選任すること。②ユダヤ人血統の大学教員は、定員の5%までとすること。③ユダヤ人血統の学生は全学生⁽¹⁸⁾の5%までとすること。」

1928年、ユダヤ人学生ハルスマン(Halsmann, Philipp)が殺人容疑で起訴されるという事件が起こった。オーストリア法制史のコグラー(Kogler, Ferdinand)、ドイツ法のカスティル(Kastil, Alfred)、心理学のエリスマン(Erismann, Theodor)、刑法のリットラー(Rittler, Theodor)が、ハルスマンが公正な裁判を受ける前にすでにユダヤ人として弾劾されていることに抗議した。ところがこの教授たちに対して、学生組合は激しい抗議行動を行った。

1938年3月13日、ヒトラーによるオーストリア併合が行われると、大学における人種差別政策的迫害が本格化した。英文学教授で学長のブルンナー(Brunner, Karl 1887-1965)は、ヒトラーの政策を批判したかどで学長職を追われ、国家社会主義者のシュタインアッカー(Steinacker, Harold)が学長になった。ブルンナーは、鉤十字旗を振るナチス突撃隊に対して、「シュシュニック万歳!」「オーストリア万歳!」と叫んだとして弾劾されていた。

新学長のシュタインアッカーは、ウィーンの文化教育省に対してさっそく電報で挨拶を送った。「ドイツアルプス大学は、不変の誓いをもって、深い感謝の念を込めて、われわれ民族が1千年の間求めてきたドイツ統一の成就をお慶び申し上げま

す⁽¹⁹⁾」と。総統ヒトラーに対する忠誠を表明したのである。

反ナチスの教授とユダヤ人教授の「粛清」(Säuberung)が行われた。上掲の法制史のコグラーに加えて、近代史のデンゲル (Dengel, Ignaz Phillip), 教会法のエーベルス (Ebers, Godehard Josef), セム語学のハフナー (Haffner, August), 哲学のシュトロールハル (Strohal, Richard) が反ナチスであることをもって解職された。例えば、シュトロールハルは、ナチスに反対し、ヒトラーにあだ名をつけたとしてゲシュタポによって告発されていた。

歯科学のパウアー (Bauer, Wilhelm), 物理学のブリュッケ (Brücke, Ernst Theodor), 音楽学のフィッシャー (Fischer, Wilhelm), 法学のヴォルフ (Wolff, Karl) は、ユダヤ人であることをもって解雇された。

1938年11月15日、インスブルック大学の大学評議会は、文化教育省に対して、すでに現在ユダヤ人学生は在籍していないが、将来もユダヤ人学生には入学許可を与えない方針であることを報告している。

1938年7月20日、文化教育省は、省令をもって、インスブルック大学の神学部の解体を命令し、神学部の教授はすべて解職された。

こうした状況にありながらも、インスブルックの教授たちは、科学者として形式的に正確な科学研究に没頭しようとしたが、実際のところ、多くの教授たちはナチスに奉仕する結果となった。例えば、1938年に設立された「遺伝・人種生物学研究所」(Institut für Erb- und Rassenbiologie) は、医学的な研究にもまして、ナチズムの純血主義に奉仕した。

3. インスブルック大学における反ナチス抵抗運動

1934年2月、ウィーンで、「護国団」に対決する形で、社会民主党の「防衛団」(Schutzbund) が武装蜂起を行った。ドルフス独裁政権は、徹底的な武力鎮圧を加え、ウィーン市長のザイツ (Seitz, Karl) をはじめ社会民主党幹部と労働者およそ1200名を逮捕し、11名を絞首刑に処した。この「ウィーン事件」を境に、社会民主党や共産党による反ファシズム闘争は根絶されてしまった。したがって、インスブルック大学においても共和主義者や社会主義者、共産主義者からの抵抗運動はほとんど影をひそめてしまった。

カトリック学生側では、1940年、反ナチス非合法団体「キリスト教学生団体連合“Alpina”」が結成された。「大学における教育と学習の自由の回復。この自由のために闘う者のみが再び自由を手に入れる権利をもつこと」をスローガンに掲げていた。6人の学生たちが、すでにナチスによって大学を追われていた歴史学教授デン

ゲルの自宅に集まって“Alpina”の結成について相談した。英文学教授のマイル(Mair, Franz)も深く関わっていた。

意識的に反ナチス抵抗を試みた数少ない教授として、心理学教授のエリスマンをあげることができよう。エリスマンは、1944年2月16日、大学行事において「心理学と大衆」(Psychologie und Masse)というタイトルで大衆心理学に関する講演を行ったが、この中でナチスの「総統崇拜」(Führerkult)をあてこするような論議を展開したために、ナチス・チロル大管区は、自然科学部の学部長にエリスマンに警告を発するよう要求した。これを受けて、2月29日、学部長のシュタインベック(Steinböck, Otto)は、講演会で吐露したようなことを大学の講義において発言すれば破滅的な結果に導くことになるとエリスマンに警告した。

全体としてインスブルック大学において、積極的な反ナチス抵抗運動はほとんど見られなかったといってよいであろう。多くの教授たちは、ナチスに対して嫌悪感と精神的屈辱を感じつつも、表面的にはこれを甘受する姿勢をとらざるを得なかった。

ヒトラー政権崩壊後の1945年5月4日、ナチスによって学長職を追われていたブルンナーが学長に復職した。ブルンナーの最大の課題は、インスブルック大学の再出発であったが、ナチスに協力した教授たちをどう扱うかという問題に直面していた。ブルンナーは、これらの教授たちに対して心情的理解を示し、何とか免責の道を用意してやろうとした。その結果、あたかも何事もなかったかのように、ナチ教授たちが再び大学の構成員となっていた。

オーベルコフラー/グローラーは、その著『インスブルック大学の歴史(1669-1945)』において、1938年オーストリアから追放されブラジルに亡命した、高名な化学者ファイグル(Feigl, Fritz)が1945年9月11日に、同じく亡命した化学者ブローダ(Broda, Engelbert)に送った書簡を引用している。

「ナチス・ペストによって汚染されたヨーロッパにおいて起こった恐ろしい出来事は、文明世界を嫌悪感と恐怖で充たした。われわれのかつての故郷は共犯(Mitschuld)というそしりを免れることはできない。われわれのかつての多くの同僚たちは、ヒトラー侵略の時代に、世界を恐怖に陥れた野蛮な体制の奴隷になることを自ら進んで、また部分的にはこれを熱狂的に受け入れたのである。彼らもまた共犯のそしりは免れない。」⁽²⁰⁾

インスブルック大学の大学記念碑もまた、この共犯性という過去の刺をそのままひだ深く隠してきたのであろうか。

V. 「白バラ」のプローブストとインスブルック大学

1943年2月20日、反ナチス抵抗運動「白バラ」のメンバーで、インスブルック大学の医学部生プローブスト (Probst, Christoph 1919-1943) がインスブルックで逮捕され、2月22日にはミュンヘンのシュターデルハイム刑務所で処刑された。この日そこで、同じ「白バラ」のメンバーのハンス・ショル (Hans, Scholl 1918-1943)、ゾフィー・ショル (Sophie, Scholl 1922-1943) 兄妹も処刑されている。他のメンバー、グラーフ (Graf, Willi 1918-1943)、ライペルト (Leipert, Hans 1921-1945)、シュモーレル (Schmorell, Alexander 1917-1943)、フーバー教授 (Huber, Kurt 1983-1943) も後日逮捕され、同じくシュターデルハイム刑務所で処刑された。

「ミュンヘンの白いバラ」といわれるように、「白バラ」の抵抗運動は、ミュンヘン大学を拠点として展開された。フーバーはミュンヘン大学の教授であり、学生たちはいずれもミュンヘン大学で学んでいた。プローブストもインスブルックの前はミュンヘン大学の医学部に籍を置いていた。1942年から1943年にかけて六つのパンフレットが作成され、郵送・配布されるが、いずれもミュンヘンにおいてである。ショル兄妹は、1943年2月18日、「男子学友諸君！女子学友諸君！」(Kommilitonen! Kommilitoninnen!) という呼びかけで始まる第6のパンフレットをミュンヘン大学で配布したところを逮捕された。

プローブストは、1942年から1943年の冬学期はインスブルック大学の医学部に受講届けを出しており、空軍の学生中隊に所属していた。2月19日、中隊の事務所に給料を取りにいこうとしたところを逮捕された。第6のパンフレットのために書かれた、プローブスの草稿がゲシュタポの搜索によってハンス・ショルの部屋から見つかっていたためである。その草稿は、スターリングラードにおけるドイツ軍の敗退を取り上げていた。「一人のほら吹き軍人の面目のために、20万のドイツ人同胞が犠牲にされた。・・・敵軍に包囲された部隊が後方まで退却することを、ヒトラーは禁じたのである。死神に捧げられた20万の兵士の血が、今こそ、殺戮者ヒトラーを告発する⁽²¹⁾。」と。

プローブストは、19歳で結婚しており、すでに3児の父であった。妻のヘルタ・ドールンの父、ハーラルト・ドールンは、「白バラ」の抵抗運動に加わって、1945年に射殺されている。プローブストの父、ヘルマン・プローブストの再婚の相手はユダヤ人の女性であった。プローブストは、「白バラ」のメンバーの中で「一番慎重だと言ってもいい人間」⁽²²⁾「内面的にみちびかれた人間」⁽²³⁾と思われていた。宗教的・道徳的信念に基づいて、人間の自由と尊厳を踏みにじるナチズムの思想を告発

しようとしたのである。

プローブストは、確かにインスブルック大学に在籍していたが、そこで「白バラ」の運動を展開したわけではなかった。ミュンヘン大学に「ショル兄妹広場」や「フーバー教授広場」があり、「白バラの記念碑」があるのはうなずける。しかし、インスブルック大学の大学記念碑にプローブストの名が刻まれる特別な理由があったのであろうか。

第二次世界大戦後、1952年に、この大学記念碑は改装され、第二次大戦の戦死者を追悼するモニュメントとなっていた。ひとつの面には「大学の戦死者」(Den Gefallenen der Universität)とあり、もうひとつの面には「1914-1918//1939-1945」とあった。つまり、第一次大戦と第二次大戦の戦没学生に対する追悼碑となっていたのである。

1960年代からインスブルック大学の「カトリック学生連盟」(Katholische Hochschulejugend)は「ショル追悼式」を行ってきた。かつて大学がナチスに深く関わりをもったことが批判されるようになった。1980年5月、「共産主義学生連盟」(Kommunistische Studentenverband)は、大学評議会に対してプローブストの記念碑を設置せよという要求を突きつけた。このような状況の中で、大学評議会は検討を進め、1984年5月17日、現在あるような状態でプローブストを記念することを決議した。「大学の戦死者」「1914-1918//1939-1945」という銘板は外され、「荣誉」「自由」「祖国」という言葉はそのまま残された。そして、プローブストの銘板の中に「ヒューマニティ・自由・民主主義」という言葉が掲げられることになったのである。

VI. 大学記念碑の歴史意識

オーベルコフラーの論文「インスブルック大学の大学記念碑」には「教授たちの日用品」(Ein Gebrauchsgegenstand der Professorenwelt)というサブタイトルがつけられている。この場合、「日用品」とは、その時々必要に応じて適当に利用される消耗品といった意味であろうか。この論文におけるオーベルコフラーの大学批判は厳しい。

大学記念碑の生成、その後の経過、そして現在の姿へとその歴史的過程をたどてくると、ナチズムの時代があたかもなかったかのように平然と第一次世界大戦と第二次世界大戦を記念し、同時にそこに反ナチス抵抗運動で処刑されたプローブストを記念するという、その歴史感覚の欠如、精神的・道徳的破廉恥性を告発せざる

を得ないのである。

オーベルコフラーはさらにインスブルック大学の非見識性を暴露する。インスブルック大学は、1966年にドイツの企業家キーン（Kiehn, Fritz）に、1970年にはドイツ市民のシュレイヤー（Schleyer, Hans Martin）に名誉大学評議員の称号を与えている。キーンがヒトラー親衛隊長ヒムラーの側近の一人であったことが判明したのは、それから4年後の1970年のことで、一ドイツ市民からの手紙によってであった。シュレイヤーもヒムラーの秘密情報部の一人としてインスブルック大学で活動していたという。

1990年1月11日、インスブルック大学の大学評議会は、1989年11月6日にサン・サルヴァドルで殺害された二人の神学部卒業生、エラキュリア教授とモンテス教授を大学記念碑で追悼することを決議した。銘板には「正義と平和のために闘った」と書かれている。これに対して、オーベルコフラーは、果たして大学の精神は「正義と平和」をめざしているか、と疑問を投じる。

神学部教授、キリスト教社会論の専門家でカトリック道德神学者のビュッヘレ（Büchele, Herwig）は、NATO 軍のユーゴスラヴィア空爆に反対しようというアピールに対して否定の態度をとったのではないかという。この空爆によっておよそ1000万人のユーゴスラヴィア住民は生活の基盤を失ってしまった。また、法学部教授で EU 統合会社法の専門家のロート（Roth, Günter H.）は、1996年さっそく『クロアチアにおける会社法と外国投資』（Gesellschaftsrecht und Ausländische Investition in Kroatien）なる著作を出版して、戦争利益たかり屋に空爆後の啓蒙活動をしているのではないかと。

オーベルコフラーは、「エラキュリアとモンテスの記念碑銘板は、特別な仕方で、大学のガウンをまとった大学教授たちの偽善を表している⁽²⁴⁾」という。エラキュリアとモンテスは、エルサルヴァドルの首都サン・サルヴァドルにある中米大学（Zentralamerikanische Universität）の教授であり、そこは「解放の神学」（Befreiungstheologie）の拠点で、エラキュリアとモンテスは共に神学者として「解放の神学」を展開してきた。エラキュリアはすでに2巻からなる『解放の神秘—解放の神学の基本概念』（*Mysterium Liberations. Grundbegriffe der Theologie der Befreiung*, hrsg. von I. Ellacuría/J. Sobrino, Luzern 1995 und 1996.）を出版していた。「解放の神学」は、「現代社会の権力に基づく構造によって生じた不正から人々を解放すること⁽²⁵⁾」をめざす神学である。1979年7月のニカラグア革命を受けて、エルサルヴァドルでもクーデターが起こり、革命評議会が成立し、社会改革が進むが、他方で内戦が激化した。そのような状況の中で、1989年11月16日、エラキュリアとモ

ンテスは他の同僚と共にアメリカに支援された軍隊に襲われ殺害された。マルクス主義に理解を示す「解放の神学」は革命勢力とみなされたのである。

インスブルック大学は、抑圧された人々の立場に立って現代世界を見るという意識をもっているだろうか、抑圧された人々の解放のために闘うという姿勢をもっているだろうか、とオーベルコフラーは問いかける。それなくして大学記念碑においてエラキュリアとモンテスを追悼するのはまさに偽善だというのである。

最後に、オーベルコフラーは最大の皮肉をこめていう。「チロルの文化財保護は、その任務の範囲を拡大して、インスブルックの大学記念碑にある二つの銘板を大学の偽善性から保護するという役割を担うべきだろう⁽²⁶⁾」と。

VII. む す び

歴史学の教授でインスブルック大学史料館の館長を務めるオーベルコフラーは、筆者が大学記念碑に対して抱いた違和感を十分に根拠あるものとして明らかにしてくれた。しかし、他方、第一次世界大戦からファシズムの時代を経て今日に至る大学の歴史を象徴する「榮譽」「自由」「祖国」という言葉を温存し、その下に人間の自由と民主主義、正義と平和のために命を捧げた殉教者たちを記憶しようとする大学記念碑は、むしろそこに違和感、不協和音を奏でることによって、人々の歴史意識を呼び覚まし今一度過去に思いをいたさせるという役割を果たしているのではないか。そのような屈折した感想を筆者はもつに至った。

1994年3月16日、インスブルック大学本部前の広場には、「クリストフ・ブロープスト広場」(Christoph-Probst-Platz)という名称が与えられた。大学本館入口の右側の壁にその銘板がはめ込まれている。この銘板の除幕式に当たって、心理学教授のグリュネヴァルト(Grünwald, Eduard)が式辞を述べている。彼の恩師は、かつてナチスの総統崇拝をあてこすり当局から警告を受けた心理学教授のエリスマンであった。また、グリュネヴァルトは、1940年に結成された反ナチス非合法団体「キリスト教学生団体“Alpina”」の学生同志であり、これを精神的に指導したのは英文学教授のマイルであった。

グリュネヴァルトは、第6の「白バラ」のパンフレットでブロープストが「男子学友諸君! 女子学友諸君!」(Kommilitonen! Kommilitoninnen!)と呼びかけた同じ呼びかけで、式辞を始めている。

ブロープストの呼びかけに応えるためには、「彼の生きた人生に対して、また彼の英雄的な死に対して、態度を決めなければならない⁽²⁷⁾」と述べ、最後に、「われわ

れが今日こうして何の恐れもなく自由に自らを決定できる国に生きていることを有難く思い、それを幸いとすべきである。それは、クリストフ・プローブストのような、かかる自由のために闘いそのために死をもいとわなかった人々のおかげなのである」⁽²⁸⁾と締めくくっている。

2001年9月下旬、「第6回ヨハネス・メスナー協会国際シンポジウム」に参加するため、チューリッヒからウィーンへ旅した。その途中、インスブルック大学に立ち寄り、それから東チロルのリエンツ（Lienz）に回った。このリエンツの聖アンドレ教区教会の前に碑があった。「オーストリアの自由のために闘った東チロルの闘士たちと、1938年－1945年のナチスの犠牲者たちを追悼して。死せる者には榮譽を、生ける者には警告を（Den Toten zur Ehre. Den Lebenden zur Mahnung）」と書かれていた。教会をめぐる壁には戦没者の氏名が彫られていた。そのほとんどがロシア戦線における戦没者であった。この東チロルでは、ナチスに非協力的な者は、収容所に入れられるか、激戦のスターリングラード戦線に送り込まれたという。

上述の国際シンポジウムには筆者以外に日本からは大阪大学の猪木武徳教授（現在、国際日本文化研究センター教授）と南山大学の山田秀教授が参加していたが、たまたま猪木教授のご案内でウィーンにある「オーストリア抵抗運動史料館」（Dokumentationsarchiv des Österreichischen Widerstandes）を訪れることができた。改めてインスブルック大学の大学記念碑に思いを馳せるとともに、チロルではどのような抵抗運動が展開されたのだろうか、機会あれば資料を集めてみたいと思った。2005年夏、もう一度インスブルック大学を訪れ、それに関する若干の資料を入手することができた。さらにリエンツに回って、リエンツ市立図書館でもいくつかの資料を集めることができた。機会があれば論稿にまとめてみたい。

インスブルック市の背後にはカルヴェンダー山系が連なり、その中腹あたりを色とりどりのハンググライダーが舞っている。氷河の水を集めたイン川が勢いよく流れ、川沿いの歩道では人々がジョギングを楽しんでいる。心地よい夏の陽がそそぎ、木陰にはさわやかな風が吹き渡り、木の葉がさらさらと鳴っている。大学本館の玄関の石段には女子学生たちがたむろしておしゃべりに夢中である。その背後の柱には「クリストフ・プローブスト広場」という銘板がかかっている。左手の木立の中には大学記念碑が立っている。かつてこの街にナチスの軍靴が響き渡り、大通りには無数の鉤十字の旗がはためいていた。そのような時代があったことを人々に思い出させるには、このアルプスの街インスブルックはあまりにも美しいのだろうか。いま一度、オーベルコフラーが引用した「記念碑というものについて最も印象的なことは、だれもそれに注意を払わないということである」という言葉を想起せずに

はおられなかった。

[付 記]

2005年8月下旬、インスブルック大学の大学図書館を訪れたさい、資料の探索・収集について、情報資料室の Caroline Jeitler 氏には大変お世話になった。また、一部の資料について帰国後ご無理をいって郵送していただいた。ここに誌上をお借りして厚く御礼申し上げる次第である。

注

- (1) 銘文は以下のようなものである。“Humanität Freiheit Demokratie. Der Andenken an Christoph Probst. Student der Medizin. Mitglied der Weissen Rose. Als Widerstandskämpfer von den Nationalsozialisten am 22. 2. 1943 hingerichtet.”
- (2) 銘文は以下のようなものである。“Zum Gedenken an Univ.-Prof. Dr. Ignacio Ellacuría S.J. / Univ.-Prof. Dr. Segundo Montes S.J. Absolventen der Theologie an dieser Universität. Am 16. 11. 1989 ermordet in San Salvador wegen ihres Einsatzes für Frieden und Gerechtigkeit.”
- (3) 日本で出版された「白バラ」に関する文献としては以下のようなものがある。
 インゲ・ショル『白バラは散らず—ドイツの良心、ショル兄妹』（内垣啓一訳）未来社、1964年。（Scholl, Inge: *Die Weisse Rose*, Frankfurt am Main 1953.）
 C. ペトリ『白バラ抵抗運動の記録—処刑される学生たち』（関楠生訳）未来社、1971年。（Petry, Christian: *Studenten aufs Schafott*, R.Piper & Co. Verlag, 1968.）
 『権力と良心—ヴィリー・グラーフと「白バラ」』（クラウス・フィールハーバー他編）（中井晶夫・佐藤健生訳）未来社、1973年。（*Gewalt und Gewissen. Eine Dokumentation von Klaus Vielhaber in Zusammenarbeit mit Hubert Hanisch und Anneliese Knoop-Graf*, Echter-Verlag, 1963）
 ハンス・ショル/ソフィー・ショル『白バラの声—ショル兄弟の手紙』（インゲ・イエンス編）（山下公子訳）新曜社、1985年。
 山下公子『ミュンヘンの白いバラ—ヒトラーに抗した若者たち』筑摩書房、1988年。
 M. C. シュナイダー/ W. ズュース『白バラを生きる—ナチに抗った七人の生涯』（浅見昇吾訳）未知谷、1995年。（Schneider, Michael C./Süß, Winfried: *Keine Volksgenossen, der Widerstand der Weißen Rose*, Ludwig-Maximilians Universität, 1993.）
 関楠生『白バラ—反ナチ抵抗の学生たち』清水書院、1995年。
 なお、ゾフィー・ショルを描いた、2005年のドイツ映画“Sophie Scholl. Die letzte Tage”（日本語題名：白バラの祈り—ゾフィー・ショル、最後の日々）は、第55回ベルリン映画祭で銀熊賞（最優秀監督賞・最優秀女優賞）を受賞している。
- (4) 増田正勝「塩、もしその味失わば」『山口大学学報』退職記念特別号、2001年2月26日、6頁。
- (5) ミュンヘン大学には、「ショル兄妹広場」と、1943年7月13日に処刑されたミュンヘン

大学教授クルト・フーバーを追悼した「フーバー教授広場」がある。

- (6) ノーベル賞受賞者は以下のようなものである。Fritz Pregl (体系的なマイクロメーターの開発に対して), Adolf Windaus (ステリンとステリンのビタミンに対する関係の構造解明に対して), Hans Fischer (ヘミンの合成に対して), Victor Franz Hess (宇宙線の発見に対して)。
- (7) 以下のような学部がある。カトリック神学部, 法学部, 経営学部, 政治学・社会学部, 国民経済学・統計学部, 教育学部, 哲学・歴史学部, 哲学・文化学部, 生物学部, 化学・薬学部, 地学・天文学部, 数学・情報・物理学部, 心理学・スポーツ科学部, 建築学部, 土木建設学部。
- (8) Oberkofler, Gerhard: Das Innsbrucker Universitätsdenkmal. Ein Gebrauchsgegenstand der Professorenwelt, in; *Das Fenster. Tiroler Kulturzeitschrift*, 34.Jg., H.70, Innsbruck, Herbst 2000, S.6794.
- (9)(10) Oberkofler, Gerhard/Groller, Peter: *Geschichte der Universität Innsbruck (1669–1945)*, Frankfurt am Main/Berlin/Bern/Wien, 1996, S.298.
- (11) Oberkofler, Gerhard: a.a.O., S.6794.
- (12) Oberkofler, Gerhard: ebenda.
- (13) 1927年1月23日, ウィーン近郊のシャッテンドルフで, 社会民主党系の「共和国防衛同盟」と右翼の自衛団「戦士連合」が衝突し, 社会民主党側の2名が射殺されるという事件が起こった。その犯人を陪審員が無罪としたことから, 1927年7月15日, 抗議デモが発生し, 法務省・裁判所の建物が放火され, これを鎮圧しようとした警察とそれを支援した「護国団」がデモ隊に攻撃を加え, 労働者側に200人の死者と100人以上の負傷者が出た。「護国団」の背後ではオーストリア財界が支援していたといわれている。ファシズムの正体が暴露された事件であった。
- (14) 木下半治「1930年代におけるファシズム」『世界の歴史28』(1930年代) 岩波書店, 1971年, 17頁。
- (15) エーリッヒ・ツェルナー『オーストリア史』(リンツビヒラ裕美訳) 彩流社, 2000年, 635頁。(Zöllner, Erich: *Geschichte Österreichs*, Wien 1990.)
- (16) 上掲書, 609頁。
- (17) 上掲書。628頁以下。
- (18) Oberkofler, Gerhard/Groller, Peter: *Geschichte der Universität Innsbruck (1669–1945)*, S. 304.
- (19) Die “Deutsche Alpenuniversität” in; *Leopold-Franzens-Universität*, hrsg. von Universität Innsbruck, Innsbruck 2001, S. 51.
- (20) Oberkofler, Gerhard/Groller, Peter: a.a.O., S. 329.
- (21) M.C. シュナイダー/W. ズュース『白バラを生きる—ナチに抗った七人の生涯』(浅見昇吾訳) 未知谷, 1995年, 148–149頁。(Schneider, Michael C./Süß, Winfried: *Keine Volksgenossen, der Widerstand der Weißen Rose*, Ludwig-Maximilians Universität, 1993.)
- (22) C. ベトリ『白バラ抵抗運動の記録—処刑される学生たち』(関楠生訳) 未来社, 1971年, 173頁。(Petry, Christian: *Studenten aufs Schafott*, R. Piper & Co. Verlag, 1968.)
- (23) 上掲書, 22頁。
- (24) Oberkofler, Gerhard: Das Innsbrucker Universitätsdenkmal. Ein Gebrauchsgegenstand der Professorenwelt, S. 6796.

- (25) 「解放神学」(liberation theology)『現代カトリック事典』(ジョン・A・ハードン編集, 浜寛五郎訳) エンデルレ書店, 1982年, 95頁。
- (26) Oberkofler, Gerhard: a.a.O., S. 6797.
- (27)(28) Grünewald, Eduard: Unser Gedanken an Christoph Probst. Eine Ansprache anlässlich der Enthüllung der Tafel “Christoph-Probst-Platz” an der Universität Innsbruck am 16. März 1994, in; *Das Fenster. Tiroler Kulturzeitschrift*, 28.Jg., H. 56, Innsbruck, Frühjahr 1994, S. 5391.